定本版

山本有三全集

第十二巻

編纂
土屋文明
高橋健二
*
題字
土屋文明

山本有三全集第十二巻
定価三〇〇〇円
昭和五十二年五月二十日　印刷
昭和五十二年五月二十五日　発行
著者　山本有三
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町七一
業務部・〇三)二六六—五一一一
編集部・〇三)二六六—五四一一
振替東京四—八〇八番
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　神田　加藤製本

人の事
無流
濁

© Hana Yamamoto.
1977. Printed
in Japan.

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

山本有三全集 第12巻 目次

無事の人　五
「無事の人」付録　九七
—初版本第九、第十章—
濁流　一一三
詩・俳句　二三五
草稿　二四五
著書目録　二六九
作品別索引　二九三
参考文献　三三
年譜　三四五
「年譜」付録　三七三
—山本有三アルバム—
編集後記　高橋健二　三八九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

山本有三全集 第12巻

無事の人

一

宇多は顔を洗うと、庭ゲタを突っかけて、海岸へおりて行った。霧が深いので、あたりのけしきは、何も見えなかった。すべてが灰いろに塗りつぶされているので、つい、三、四メートルさきの松の木さえ、それとは見わけられないほどだった。しかし、朝の空気は非常に気もちがよかった。カミソリで、えりもとを軽くなでられるような、すっとした感じである。こんな気分を味わったことは、近ごろにないことである。ゆうべのあんまがきいたのかもしれない。ゆうべは、いつになく、ぐっすり眠れた。

霧の中からさざ波の音が静かに聞こえてくる。彼は久しぶりで海の調べを聞いた。しかも、それが深い霧の中から響いてくるので、ひとしお趣きがあった。ザブウッ、ザブウッという単調なくり返しではあるが、その単調なくり返しの中に、何かゆったりしたものがひそんでいた。動くもの、砕けるものの中に、動かないもの、砕けないものが、大きくからだに伝わってくる。

「海はいいなあ。」

彼は、そう思わないではいられなかった。海のながめは、すっかり閉ざされているにもかかわらず、せわしないさざ波の音の中から、不思議に広びろとしたものを感ずるのである。彼は海のほうに向かって、大きく深呼吸をした。

それにつけても、ゆうべここにやって来て、いいことをしたと思った。今どき、こういう所に来

るのは、どうかと思って、なかなか踏んぎりがつかなかったのだが、迷ったことが、むしろ、おかしいくらいだった。

足もとを見ると、厚い、灰いろの幕のすそを少しもちゃげて、白いものが頭を出しては、かわいらしく、砂の上にころがっていた。ここはうち海なので、波も湖水のようにおだやかだった。

彼は海岸をひと歩きして、お宮のある松ばやしの中に出た。それから宿やの横手の粗末な入り口をはいって、へやのほうへ帰ろうと思った。この宿には一年に一度か、二年に一度ぐらいしか来ていないのだけれども、昔からのなじみなので、いっぱし様子を知っているつもりで、そんな抜け道を選んだのである。ところが、少し行くと、うしろのがけが宿やの建てものにのしかかるように迫っていて、この道が通り抜けられるのかどうかさえ、怪しくなってきた。軒の下を見ると、さかなを運んで来たらしい竹カゴや、あきダルなどが置いてあった。どうも料理場の裏ぐちらしい。

これはいけないと、宇多は思った。ひっ返そうか、通り抜けようか、彼はちょっと思案した。ふと、横を見ると、がけから落ちてくる、細い流れのそばに、なんか黒いものがうずくまっていた。霧がたちこめているので、よくわからなかったが、じいっとすかして見ると、やや小がらの老人が、余念もなく刃ものをといでいるのだった。まるでトイシに吸いつけられているように、人の近づいたことも、てんで気づかない様子だった。

その男は、ゆうべ呼んだあんまによく似ていた。からだのがっしりしているぐあいから、にがみばしった顔つきまで、そっくり、そのままである。しかし、まさか、目くらが刃ものをといでいるはずもあるまい。多分、料理番かなんかだろうと思った。それにしても霧の中で、じいっと目をつむって刃ものをといでいるこの老人は、なんというりんとした構えであろう。それはただ指のさきを動かしているのではない。腕で、肩で、腰で、いや、からだ全体でといでいるのだ。口を結び、

息をこらして、身も、魂も、ことごとく、小さい光るものの上に集中させていた。それは、さながら神に祈りをささげている人の姿だ。静かでありながら、近づくと、はじき飛ばされそうなものを、あたりにただよわせていた。

こんなに一心に刃ものをといでいる人間を見たことがない。宇多はその真剣さにけおされて、この男にことばをかける気になれなかった。彼は静かにくびすを返して、あと戻りをした。

この宿やは、もと個人の別荘であったが、それが拡張されて旅館となり、今では別に立派なホテルまでも建っているくらいで、敷き地が、なん万つぼというほどあるのだから、裏ぐちなぞからはいると、つい、まい子になってしまう。そこで、今度は、おもて門のほうへまわって、やっと、へやに戻った。

肉食を禁じられてる彼は、わざと日本館のほうを選んだのだが、へやにはいると、テーブルの上に、朝の食事が並んでいた。多分、散歩に出たあいだに、女中が置いて行ったものに相違ない。太平洋戦争が始まって以来、どこの宿やでも、こういうことになってしまった。

みそ汁のフタをとると、あったかい湯げがぽうっと立った。まだ置いて行って、まもないものらしい。なかみは前の海でとれたアサリである。もうそろそろしゅんではなくなるが、とりたてのせいか、おワンの中から、海のかおりが伝わってくるような気がした。

食事のあと、彼はカバンの中から、ハトロンで表紙をくるんだ一冊の洋書を取り出した。これは、真珠湾攻撃の翌年、出版された本であるが、最近の交換船で帰って来た友人が、ぜひ目を通しておくようにと言って、こっそり貸してくれたのである。ウェルズ大学の国際政治学の教授、エドワード・ハレット・カーの書いたもので、「平和の条件」という本である。「平和の条件」などという書

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

物は、今日の時勢とは全く逆行しているものだが、しかし、逆行しているのは、この本ではなくて、むしろ今日の時勢であろう。彼はこの本を手にすることに相当の危険を感じながらも、そういう危険の中で、そっとページをめくることに、言いしれぬ喜びを持っていた。彼がここにやって来たのは、医者から転地を勧められたためであるけれども、一つには、だれにも妨げられずに、早くこの本を読み通すことだった。そして、長くは借りておけない本だから、重要な点だけ、ノートをしておこうと思ったのである。

彼はすぐ読みだした。海外でも評判の高いものだと言うだけあって、さすがにおもしろい。彼はコンサイスを手にしながら、しきりに横もじの上に、目を走らせていた。

女中がおゼンをさげに来た。宇多は女中の顔を見たら、ふと、あんまが頼みたくなった。ゆうべは珍しく眠れたけれど、たまに眠れたせいか、かえって、疲れが出てきたような気がする。

「ねえさん、すまないが、ゆうべのあんまさんを呼んでくれないか。」

「まあ、おあいにくですこと。あのあんまさん、たった今、よそのお座しきへ出たばかりなんで。それじゃあ、すぐ、代わりをお呼びいたしましょう。」

「いや、代わりでなく、あの人がいいね。あのあんまさん、なかなかうまいよ。」

「どなたも、そうおっしゃるんでございますよ。よほど腕がいいようでございますね。けさのお客さまなんかも、お名ざしで——へえ、名まえでございますか、為(ため)さんていうんです。ほかのあんまさんじゃお気に召さないんで、ゆうべのうちからお頼みになっていて、お目ざめになると、そのまま、おとこの中でおとりになってるんでございますよ。それで、けさは早くから仕事にまいっておりまして、つい、さっきまで、手がすいておりましたのに、本当に惜しいことをいたしました。ひと足ちがいで……」

「それじゃあ、向こうがすんでからでいいよ。」
食事のあとだから、そのほうがかえっていい、と宇多は思った。しかし、女中のことばで、ふと、霧の中の男のことが、頭に浮かんだ。
「あのあんまさん、さっき、裏のほうで見かけたような気がするんだが、ちがうかしら。」
「散歩においでになった時ですか。そうかもしれません。それじゃあ、カミソリをといでやしませんでしたか。」
「ああ、なんか刃ものをといでいた。——あの人、いくらか見えるの。」
「いいえ、ちっとも見えやいたしません。」
「それで、よくとげるね。」
「とげますとも。そりゃあ、カミソリとぎに、とがしたよりも、為さんにといでもらったほうが、ずっと切れますわ。ですから、あの人の手がすいていると、みんな、いろんなものをといでもらうんですの。なんでも、もとは大工さんだって話ですわ。ことばがぞんざいでございましょう。」
「そうだね。しかし、あのほうが飾りがなくて、かえっておもしろいよ。」
ゆうべは、たいして話もしなかったが、あんまにしては、ぶっきらぼうなことばだと思った。なるほど、そう言われると、職人あがりのような気もする。彼は随分あんまをとったけれども、大工あがりのあんまというのは、これが初めてだった。
女中が去ると、宇多はまた本を開いた。読んでゆくうちに、「戦争というものは決して終局のものではない、いつも新しい秩序の発端なのである。」ということばにぶつかった。彼は冷やっとした。
今、国民は、この戦争を戦い抜こうとしている。いや、戦い抜くことをしいられている。しかし、

戦いが済んだら、どうするのだろう。戦い抜くなぞと言っても、日本はもう息ぎれがしているのだ。このままではとても勝てるとは思えない。よし、仮りに勝ったとしても、それで、すべてのかたがつくものではない。この本の著者が言っているように、戦争は、むしろ次の芝居の幕あきなのだ。しかも、この次の幕は、今の戦争よりも、もっと重くるしいものにならないと、だれが言えよう。まだ読みだしたばかりだから、よくわからないが、著者は戦争のあとに、一種の進歩的革命？　を予想しているもののように思われる。

もちろん、この本はイギリスで出たものであるから、イギリス、またはヨーロッパの問題が中心になっている。ジャパンということばも、たまには出てくるが、日本に関することは、ほとんど論じられていない。しかし、日本人である宇多は、こういう本を読んでいながら、その文字のあいだから、しきりに「日本」を読みとろうとしていた。彼にとっては、現在の戦争ももとより気がかりだが、戦争のあとに起こってくる事がらのほうが、もっと心配だった。

彼はパタリと本を閉じて、顔をあげた。いつのまに霧が晴れたのだろう。そとには明かるい日がさしていた。女中の話では、けさのような深い霧は、このへんでは、ついぞないことだというが、さっきまでは、一面に灰いろの世界だったのに、まるで、ちがった世の中が出現したような気がする。

目の前には、緑の海が美しく広がっていた。遠くに、かすみのように、淡くたなびいて見えるのは、このうち海を抱いている渥美（あつみ）半島であろう。あちこちに、いくつも島がちらばっている。近くには、竹島がくっきりと姿をあらわしていた。島へ渡るコンクリートの橋が、白く光っている。月なみのようではあるが、小さな漁船が一、二はい浮かんでいるのも、なごやかな風景である。風もないと見えて、海上には、しら波も立っていない。全く、平和そのもののようなけしきで

ある。きょうも、どこかで、人と人とが殺し合いをやっているのに相違ないが、このけしきを見ていると、どこに戦争があるのかという感じである。

けれども、日支事変が起こってから八年、第二次欧州大戦が始まってから五年、太平洋戦争になってからでも、もう足かけ四年になる。今、世界は血みどろになって争っているのだ。そして、その血みどろの中から、大きな変革が予想されているのだ。宇多はそのことを考えると、静かな海の向こうから、また、けさのような暗いものが、もくもくと迫ってくるような気がして、思わず目を伏せた。

二

「そうですか。ゆうべは、よくおやすみになりましたか。そいつぁあ、ようがしたね。眠るのが一番でござんすよ。よく眠れさえすりゃ、てえげえの病気は直っちめえます。」

「まさか、そうもいくまいが。」

「いいえ、ほんとでござんすよ。そりゃあ、なんの病気もってわけにゃあいきませんが、まあ、十の八、九は、そう思ってまちげえござんせんね。――だんなの肩は、随分、かとうございますね。こりゃあ、だいぶ金を食った肩だ。」

「ははははは、そんなこと、わかるかね。」

「わかりますって。そいつがわからねえようじゃ、商売はできませんや。だんなの肩は凝ってるにゃあちげえねえが、このかてえのは、半分はもみだこだね。」

「もみだこ？」

「あんまりもませたんで、なんのこたあねえ、肩にたこができちゃったんでさ。こういう肩は、あ

んま泣かせですよ。」
「それはお気の毒だね。」
「ところが、だんな。ここんところ、どうです。――きくでしょう。」
「うム、それ、それ。」
「こいつは、ほんとに凝ってるとこです。」
「それを一つ、もみほぐしてもらいたいね。」
「おっしゃる通り、もみほぐしてえんだが、情けねえことに、あんまなんかの力じゃあ、本当には直りませんや。」
「すると、どうすればいいのかね。」
「そこですよ、だんな。さっき、わっちが言ったなあ。ようく眠るこってすね。眠れさえすりゃ、こんなものは、ひとりでに直っちめえますよ。そりゃあ療治すれば、ちったあらくになりますが、そんなもなあ、一時しのぎでさ。凝りがほんとにほぐれるってわけにゃいきません。」
「なるほどね。」
「だいたい、人間は生きものなんだから、生きものであるからにゃあ、自分が生きてくのに都合のいいように、からだのからくりもできてるってわけのもんじゃあござんせんかね。人間、人なみに食って、人なみに働いて、人なみに寝さえすりゃあ、そう病気にかかることはねえはずですよ。よしんば、病気になったところで、てえげえは、からだのほうで、じねんに直してくれますよ。こいつは生き身のありがてえところなんで。そこへゆくと、もみ療治なんて、たかの知れたもんでさあ。」
「そう言えば、そんなもんだね。しかし、そんなことを言っていると、君らの商売は、あがったり

になりゃしないかい。」
「えへへへ。でえ丈夫でござんすよ。ありがてえことに、お客さんのねえってことはござんせんや。――なにも、こんなことを言って、てめえで、てめえのしょうべえにけちをつけるにゃああたりませんが、まあ、正直な話、いま言ったようなもんじゃござんせんかね。そりゃあ、わっちにしたって、これまで随分、いろんな病人を扱ってきました。それで、つい四、五年めえまでは、あの病人も、この病人も、わっちの腕で直したんだと、こう思ってましたが、とんでもねえ、うぬぼれでさあ。なあに、てめえが直したんじゃあねえ、じねんに直ったんですよ。こっちの腕じゃあねえ、あちら様のお力なんでさ。ねえ、だんな、そうでござんしょう。だから、わっちは、まあ、せいぜいのところ、病気の直るお手つだいができりゃあ、結構だと思ってますんで、へえ。」
「あんまさんで、そういう考えを持っている人があるかね。」
「さあ、そいつはわかりませんが、ほかの連中はどうだろうと、わっちは、そう思いこんでますんで。」
「ところで、君はどうして目が見えなくなったの。急に風眼かなんかにかかったのかね。」
「この目でござんすか。――へへへへ。つぶれちゃった目の話なんかしたって、だんな、仕方がござんせんや。」
「女中さんに聞くと、君は、もと、大工さんなんだってねえ。」
「へえ、そうでござんす。」
「目が見えなくなった時は、さぞ困ったろうね。」
「そりゃあ、もう、困ったぐれえな段じゃござんせん。死んじめえてえくれえでした。大工（でえく）で立とうと思ってたのに、それが、あなた、目を取られちまっちゃ、どうしようもござんせん。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com